

みつつの“わ”

R.6. 6月号 No.3

河内長野市立長野小学校
支援人権部発行

6月とは思えないほどの暑い日が続き、温暖化の影響かと思うと、これから地球はどうなるのだろうと心配になります。適度な運動をして汗をかく、こまめに水分補給をするなどして、これから本格的にやってくる夏に向けて、暑さに対応できる体作りを心がけていきたいものですね。



理解しておきたい発達障がい part.2

注意欠如・多動症(ADHD)とは

今回は、注意欠如・多動症(Attention-Deficit · Hyperactivity Disorderの頭文字をとって、ADHDと言われることが多いです。以下 ADHDと記します。)について紹介します。

前月号に掲載した限局性学習症(SLD)が学習面の困難さだとすると、ADHDは、行動面の困難さであると言われ、次の3つのタイプがあります。

多動性・衝動性優勢型

- じっとしにくく、常に体のどこかが動いている。
- 目に入ったものに次から次へと反応し、一つのことに集中できない。
- 目に入ったのをすぐに触り、静止がききにくい。
- 欲しいもの、したいことの我慢が困難。
- よくしゃべり、人の会話に横入りする。
- ささいなことすぐに手を出したり、大声を出したりしてしまう。
- 飽きやすく、すぐにめんどうがってしまう。
- けがが多い。
- 順番を待てない。など



不注意優勢型

- 持ち物をよくなくす。よく忘れる。
- 人が話しているのに、聞いていないように見える。
- しばしば、ぼ~っとしている。
(しばしば、あくびをしている。)
- 部屋の片づけや物の整理ができない。
- 計画性がなく、物事を順序立ててできない。
- やるべきことを最後まで仕上げることができない。
- 不注意による間違いが多い。
- 行動がワンテンポ遅れる。
- 注意の持続が困難。
- 出かける前の準備に時間がかかりすぎる。など



混合型

上記の多動性・衝動性と不注意の特徴を併せもっている。

ADHDのある子どもは、静かな環境の中、1対1で学習していても、次のようなことがしばしば起こります。

- 一生懸命やろうとしているにもかかわらず、頭がぼーっとしてくるのか、何度もあくびが出て集中が続かなくなり、指示も入らず、覚えたり考えたりが困難になる。
- 目の前で話していても、しばしば聞いていないことがあったり、部分的にしか聞いていなかったりする。
- 人の動きや物音に敏感で、それが気になって注意がそれる。
- 話を最後まで聞かずに、途中で反応してしまう。
- 次にすることが分かると、指示を待てずに始めてしまう。
- 今行っている活動と全く関係のない話を突然し始めてしまう。



本人は、悪気もふざけているつもりもないのですが、ついいつそうなってしまうようです。静かで気が散りにくい環境でも上記のような状態であれば、たくさんの子どもたちが学ぶ刺激の多い学級での授業となると、集中して情報を受け取ることが困難になります。このような状態であれば、本来、認知能力が高くても、その能力に見合った学力がつきにくくなります。

多動性・衝動性優勢型の場合、行動が目立つので気づかれやすいのに対して、不注意優勢型は、おとなしく座っているので、周囲に気づかれにくいことが多いです。そのため、高学年になり学習の遅れが顕著になって、初めて気づかれることができます。学習の遅れの背景に、このようなADHDの特性が隠れていれば、その特性に対する適切な支援をしないと問題解決されません。

支援について

①二次障がいの予防

ADHDのある子どもは、その特性のために、叱られることが多くなってしまいがちです。叱られ体験ばかりが積み重なってしまうと、自分のことを「どうせ俺は…。」と悲観して、自信ややる気を失わせてしまいます。反抗的な態度として現れたり、反社会的な行動をしてしまうようになったりすることもあります。これが二次障がいでです。

頭ごなしに怒ることは、逆効果です。本人に悪気はないために、なぜ怒られているか分かっていないこともあります。ダメな行動を明確にして、どうすればよいかと一緒に考えていくことが大切です。子ども自身がわからない時には、丁寧に教えてあげます。できるようになるまで、温かい声かけや手助けをして見守ります。よい行動に変わったときや、できたときには、しっかりと褒めてあげることが大切です。



②教育的アプローチ

環境調整をした上で、褒められ認められる体験を積み上げるとともに、子ども自身が、自分の特性を知り、行動のコントロール法を学ぶことが必要です。そのために、注意集中トレーニングや多動・衝動性を抑制するトレーニングなどを行います。

③医療との連携

①②の手立てを十分に行っても、なかなか成果が現れない場合、医療と連携を行い、薬の服用が効果的なこともあります。

次号は、自閉スペクトラム症（ASD）についてお知らせします。